

吉野川を守る会

河川美化運動推進ポスター入選者が決定しました

吉野川を守る会では、吉野川流域7市町村の小・中学生を対象に河川美化をテーマとしたポスターを募集したところ、総数857点(小学生416点、中学生441点)の応募がありました。審査の結果、次の皆さんが入選しました。(敬称略)



中学生の部【特選】

向井 広佑(五條東中学校2年)

【特選】

▽小学生の部

杉谷 侑紀 (下市小学校5年)

▽中学生の部

向井 広佑 (五條東中学校2年)

【金賞】

▽小学生の部

山田 篤輝 (大淀希望ヶ丘小学校2年)

安満 更紗 (西吉野小学校6年)

▽中学生の部

松本 奈子 (大淀中学校1年)

前田 智美 (五條西中学校2年)

榎井 健吾 (東吉野中学校3年)

【銀賞】

▽小学生の部

井上 寛弘 (五條小学校1年)

中窪 真聖 (大塔小学校2年)

川ノ上 瑞穂 (宇智小学校3年)

福塚 祥子 (宇智小学校4年)

小川 はるか (吉野小学校5年)

岡 実乃里 (西吉野小学校6年)

▽中学生の部

新田 紗生 (下市中学校1年)

辻内 優 (五條東中学校1年)

中西 彩夏 (五條東中学校2年)

島田 奈菜 (五條中学校2年)

辻内 翼 (五條東中学校3年)

池田 ゆか (川上中学校3年)

【銅賞】

▽小学生の部

藤田 修右 (阿太小学校1年)

岡 弘輝 (野原小学校2年)

窪田 資久 (宇智小学校3年)

小川 太雅 (吉野小学校3年)

宮脇 優生 (西吉野小学校4年)

谷口 元太 (五條小学校5年)

笹谷 壮志 (五條小学校5年)

植田 倫子 (黒滝小学校6年)

▽中学生の部

宇恵 道風 (五條東中学校1年)

大田 菜月 (下市中学校1年)

高田 弥生 (五條西中学校1年)

北谷 祐美加 (五條中学校2年)

辻本 菜美 (五條西中学校2年)

中窪 るみ (五條東中学校2年)

平 晏奈 (西吉野中学校3年)

曾和 大貴 (西吉野中学校3年)

城之内勇樹 (川上中学校3年)

新町と松倉豊後守重政

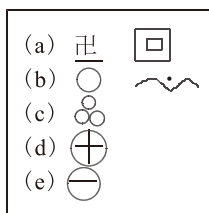
第8回 松倉重政よもやま話

右

は、大阪城の石垣の刻印です。(a)は加賀藩、(b)は萩藩(c)は松浦隆信、(d)は島津忠興で、(e)は他ならぬ松倉豊後守重政(島原藩)の刻印です。大阪城へ行った時、この刻印の石を探索してみたいかでしょうか。

さて、松倉重政は、築城技術に優れていたと言われています。実際、大名としては格式以上の、規模壮大な島原城を構築したばかり

ではなく、数多くの築城に関わっていたと伝承されています。例えば、『松倉記』には以下のようなことが書かれています。「大坂の陣以前では大和国宇智郡二見城、それ以後は肥後国島原城・浜城、唐津城、松浦平戸城は松倉重政が依頼を受けて縄張りを行った。五嶋淡路守の場合は、松倉が海を渡って縄張りを実施し、しかも、島原から工事役人や石切人足を送った。讃岐国丸亀城、豊前国小倉城についても、松倉が渡海して相談に乗って縄張りをした」。事実かどうかについては確証がなく怪しげです。しかし、一方、島原の乱で原城跡に立て籠もった一揆方の指揮者の一人、幕府方の鎮圧軍に内通した山田右衛門作は、乱後に次のように語っているのです。「カノ城(島原城のこと)ト申ハ、長州親父豊後守コシラヘオキニシ城ナレバ、要害トリワケカシコキニ、城内ノ人々コトヲ先途ト防グケレバ、城方ノ鉄砲ニ、キリシタンノ奴バラ二百余人討タレケレバ、サシモニ猛キ徒党ヲモ続イテ攻ムルニ及バズ、ソノママ引イテ退キニケル」。<豊後守がこしらえた城だからこそ取り分けて要害>であると述べていることに注目したいと思います。当時、松倉重政が築城すると、城は要害堅固になるという評判・通念があったものと考えられるからです。こうして見ると、『諸国古城之図』(浅野文庫蔵)に二見城が取



り上げられた一因は、評価されていた彼の築城法が目目されたからだと思われ得るでしょう。大げさに見える上記の「松倉記」の記事も、この松倉重政に対する評判や風評を反映しているのだと考えられます。

ところで、今から170年前の天保9(1838)年閏4月16日のことです。幕府の巡見使役人3人が五條に見廻りのため、江戸からはるばるやって来る事になりました。その時の五條代官所役人芳賀某は「御巡見様、二見村松倉豊後守様城跡御見物有之候も難斗」と述べたので、新町村などは敷砂をするなど道路を整備しました(『柏田家文書』)。結果としては二見城跡の見学は無かったのですが、ここで注目したいのは、19世紀の幕末になっても、松倉豊後守重政築城の城が、武家社会では興味を引かせるという事実です。

ここで、改めて『五條十八景画帖』(初代五條代官河尻肥後守春之制作：ちなみに、河尻家の先祖は肥後国飽田郡で、肥後国は有明海を挟んで島原の対岸です)のことを思い合わせてみる必要があるようです。紀州藩の文人祇園南海が二見城のことを漢詩で詠い、その約100年後に更に前老中白河藩主松平定信がそれを揮毫した作品です。1700年頃と1800年頃に、それぞれ二見村の古城が彼らに興味を与えたのは、古城周辺の風景が一般的に美しく、単にノスタルジーをそそただけでは無かったのではないのでしょうか。それは、まさに松倉豊後守重政その人が縄張りを施した城であったからこそなのではないのでしょうか。大名や武士社会間での本格的な戦闘が無くなって久しく、江戸時代にあって最後の戦闘となった大坂の陣や島原の乱は、軍功を立てた松倉豊後守重政と乱後に廃絶の処分を受けた松倉藩を通して、<平和な社会>の中で、本来戦闘を職とする武士達に何らかの思いを懐かせ続けていたのだと推察されます。言い換えれば、松倉豊後守重政は、武士社会にある種の意識、感懐を喚起する媒体となっていたのだと考えられるのです。

(新町と松倉豊後守重政400年記念事業実行委員会委員 藤井正英)